

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月18日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320067

研究課題名（和文） 声とモデルニテに関する比較総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive study comparing for voice and modernity

研究代表者

高木 裕（TAKAGI YUTAKA）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60116944

研究成果の概要（和文）：

〈声〉に関する文化史的、文学的研究を中心として、近代から現代へと時代が変化する中で、〈声〉の力の再生がどのように追究されたかを検証するために、ボルドー第3大学(2010年度)と新潟大学(2011年度)において、国際シンポジウムを開催した。研究発表、討論を通して、近代の特徴として、〈主体〉を超えた何ものかを〈声〉によって指向するが、ここでは同時に〈他性〉の表出という問題にも逢着すること、またこのことは文学のみならず、現代メディアの特徴としてもとらえうることを確認した。

研究成果の概要（英文）：

To make clear how man attempted to revive the original power of voice in the changing era from modern to contemporary, we held international symposiums around literary and cultural studies : at the University of Bordeaux III in 2010, at Niigata University in 2011. Through communications and debates, we was able to understand that voice symbolize something exceeding <subject/sujet>, and to confirm the problem of <autrui>. On this point, we could find not only a literary characteristic but a characteristic of modern media.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	8,200,000	2,460,000	10,660,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：〈声〉

1. 研究開始当初の背景

平成17年以降、新潟大学人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」（代表・高木

裕）は、協定校のフランスのボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」（代表・ドミニク・ラバテ）と共同研究を開始した。平

成 17 年にフランスにおいて、文学テキストにおける〈声〉の研究の第一人者であるドミニク・ラバテを、平成 19 年にはフランス近代詩の〈声〉の変容を研究するエリック・ブノワを、平成 20 年度にはエリック・ブノワとともに、フランス 19 世紀絵画の専門家であるドミニク・ジャラセを招待し、新潟大学 19 世紀研究所と共催で、国際シンポジウムを開催し、19 世紀の再評価を軸に、モデルニテ概念の洗い直し、〈声〉の問題群と密接に関わるモデルニテの射程を再確認するに至った。

2. 研究の目的

平成 19～20 年度に文部科学省科学研究費補助金をうけた研究「〈声〉とテキストに関する比較総合的研究」において、日本古典文学、フランス文学、イギリス文学、アメリカ文学、ロシア文学を専門分野とする日本人研究者、およびフランス人共同研究者とともに、文学テキストにおける「声」の出現の様々なあり方とその変容を明らかにしようとしてきた。本研究はその継続であるが、これまでの研究のなかで浮上してきた「モデルニテ（近代性）」の概念に焦点をあて、〈声〉の出現と変容を、より明確に歴史的な問いとして探究することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 平成 21 年度に、声とモデルニテをテーマに掲げ、日仏共同研究により、各国文学、絵画、映画の分野における〈声〉の生成と変容をモデルニテの視点から解明し、その研究成果を海外において発表するために、ボルドー第 3 大学でシンポジウム「〈声〉とモデルニテ」を企画し、開催した。近代（モデルニテ）を大きな転換点ととらえ、〈声〉がテキスト生成に果たす役割がどのように変容し、そのことがまた文学表現にどのような変化をもたらしたかを検証した。基盤研究（B）

の研究代表者、連携研究者（3 名）及び研究協力者（1 名）の 5 名と、ボルドー第 3 大学からは、6 名の研究者が研究発表を行い、活発な質疑応答があり、問題点が浮き彫りにされた。

同年度に、共著『〈声〉とテキストの射程』（高木 裕編著 知泉書館）を刊行した。人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」の研究成果を集めたものであるが、同時に「〈声〉と身体に関する比較総合的研究」プロジェクト（プロジェクト参加者 5 名が執筆に参加している）の研究成果も含まれている。本書では、〈声〉の諸相にさまざまな分野（各国文学、哲学、文献学、表象文化論、メディア論）からアプローチし、〈声〉の文化、音声言語と文字言語、口承とテキスト、テキスト生成、テキスト解説などの問題を深め、新たな人文学の構築を目指し、〈声〉とテキストの問題をいわゆる「テキスト論」という文学理論的な領域のみにとどめることなく、〈声〉とテキストとが織りなす濃密で豊かな世界を照らし出す試みである。

(2) 平成 22 年度には、ボルドー第 3 大学でのシンポジウムの発表原稿をもとに欧文論集「Voix et Modernités」（新潟大学人文学部）を刊行した（2011 年 3 月）。研究交流の意義を再確認するとともに、〈声〉のテーマが孕む問題群の研究意義を国内外にアピールすることができた。

(3) 平成 23 年度には、〈声〉の文化が、これまでの歴史の中で、書記言語との攻防から始まり、制度的なさまざまな制約と葛藤、軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに、文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力、豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか、その諸相を例示し、〈声〉から、いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを、具体的なテキスト

分析を通して、明らかにすることであった。そのために「〈声〉の制度 —継承・障害・侵犯—」をテーマに、9月に新潟大学で国際シンポジウムを開催した。基調講演はマルティーン・マテュー=ジョブ（ボルドー第3大学教授）により、「言語の単一性の下におけるフランコフォニーの声の多様性について」のタイトルで行われ、第2部では、5名の研究者による研究発表が行われ、〈声〉を取り巻く様々な制度の問題が明らかになった。

4. 研究成果

人文学部のプロジェクト「声とテキスト論」は、ボルドー第3大学との共同研究報告、国内研究者の講演・研究会報告書、紀要のプロジェクト特集の論文など、これまでの研究成果を広く社会に発信してきた。その成果を集成し2010年3月、単行本『声とテキストの射程』（知泉書館）が刊行された。また2011年3月に、2010年3月に開催された国際シンポジウムの欧文研究論集 *Voix et Modernités*（人文学部）を刊行した。平成24年3月にも、9月の国際シンポジウム「〈声〉の制度」の研究成果をまとめて、『〈声〉の制度 —継承・障害・侵犯—』（新潟大学人文学部）を刊行した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

（1）佐々木充、大伴家持「絶唱三首」の近代性について—窪田空穂による家持発見をめぐる—、人文科学研究（新潟大学）、査読なし、126輯、2010 pp.53-80

（2）鈴木孝庸、當道の『妙音講縁起』—解題と翻字・影印—、人文科学研究（新潟大学）、査読無し、126輯、2010、pp.1-26

〔学会発表〕（計6件）

（1）佐々木充、Establishment of voice and departure from it: the cases of confucianistes in 17th-18th century Japan,

〈声〉の制度（国際シンポジウム）2011年9月16日

（2）石田美紀、〈声〉と〈声もどき〉—複製技術時代の主体、〈声〉の制度（国際シンポジウム）、2011年9月16日

（3）高木 裕、ネルヴァルにおける抒情主体と〈声〉、国際シンポジウム「〈声〉とモデルニテ」（ボルドー第3大学）、2010年3月15日

（4）佐々木充、古代における近代の声？、国際シンポジウム「〈声〉とモデルニテ」（ボルドー第3大学）、2010年3月15日

（5）番場俊、モデルニテとドストエフスキーにおける声の条件、国際シンポジウム「〈声〉とモデルニテ」（ボルドー第3大学）、2010年3月15日

（6）鈴木孝庸、日本の叙事詩「平家物語」と語り、国際シンポジウム「〈声〉とモデルニテ」（ボルドー第3大学）、2010年3月15日

〔図書〕（計4件）

（1）高木 裕編、新潟大学人文学部発行、〈声〉の制度（国際シンポジウム研究報告集）、2012年、116ページ

（2）高木 裕、高志書院、詩のテキストと〈声〉—ジェラルド・ド・ネルヴァルの詩法—、2012年、180ページ

（3）高木 裕編、新潟大学人文学部発行、2011年、*Voix et modernités*, 163ページ

（4）高木 裕編、知泉書館、〈声〉とテキストの射程、2010年、348ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 裕 (TAKAGI YUTAKA)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：60116944

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

佐々木 充 (SASAKI MICHIRU)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：60105228
鈴木 孝庸 (SUZUKI TAKATSUNE)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：90143742
番場 俊 (BANBA SATOSHI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90303099
石田 美紀 (ISHIDA MINORI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：70425007
平野 幸彦 (HIRANO YUKIHIKO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20275001